

「多い農家人口」は、「多い農業従事者」を意味するのではなく、農家内の「多い非農業従事者」を意味している。

新田開発時代には、三富新田が周辺地域に強い影響を与えたが、現在は、三富地区をとり囲む鉄道沿線の周辺地域から強い影響をうけている。現在のところ顕著なのは、農家内の質的变化であるが、近い将来三富地区が景観的にも全く変容することが十分考えられる。大型住宅団地の造成がきっかけとなり、純農村から、東京への通勤住宅都市へと著しい変容を遂げた福岡町の例は、三富地区の今後の変容を考える上で、参考になると思う。

茨城県古河市の地理学的考察

山口 とも子

卒業論文として調査・考察を行った地域は、茨城県西端の古河市である。関東平野のほぼ中央に位置する古河市は、人口約5万人、面積21.03km²の小規模な地方都市である。しかし歴史の古いこの都市は、古くから経済・文化の中心地であるが、近年東京の勢力圏の増大とともに、東京圏の一都市となりつつある。

このたびの考察は、自然のおよび歴史的基盤の上に、今日の古河市の都市機能の現状を調査することを目的とし、主に東京の勢力がそれらにおよぼす影響に注目した。

古河市は、戦前まで茨城県でも屈指の工業都市であったが、今日の主な機能は商業である。従って、商業機能から、この地方のnodal regionとしての性格の把握と、また東京商圏の影響を考察のpointとした。

研究対象は、古河市域にみられる自然・人文のすべての事象としたが、自然環境、歴史的背景は、市の発達の基盤として略述するにとどめた。

古河市は、関東構造盆地底付近に位置しているが、北からのびる台地上に位置しており、その土地の生産性は低い。南を利根川、西を渡良瀬川に境されているが、台地上に位置するためそれらの河川の洪水が古河市に及ぼす影響は少なかったが、水上交通の面で、市の発達に大いに貢献した。しかし今日では、この両河川は、交通の支障となっている。

歴史をふりかえると、15c半～16c末にかけての公方時代が最も盛えた時期であり、当時の古河は関東の政治・文化の中心であった。江戸時代に利根川の改修が行われ、その結果、今日のような河川に囲まれた土地となり、古河の勢力圏は縮小された。しかし河岸場として、また奥州街道の宿場として盛え、明治になると、製糸業が興り、その隆盛は、第2次大戦まで続いた。

このような基盤を明確にする一方、市の構造を、土地利用の形態、人口密度、建築率により明らかにし、主なテーマとする、市の機能の考察の導入とした。

今日の古河市は、人口においては、北関東的性格からの脱皮すなわち着実な人口増加がみられたが、

これが直接市の発展に結びついていないことは、鉄道の定期利用者数の増加に示されていた。人口の産業構造では、二次産業従事者が最も多く示されていたが、この定期客の増加からも、古河市の主な産業は、第三次産業であることが判明する。

商業機能は、小売業が主であり、隣接諸都市の中では企業化が進んでいた。

商業圏はアンケートにより決定したが、その決定基準は、客観性に乏しいが、隣接・二次的隣接町村を対象とし、その中でランクづけを行い、最下位のを除外する方法をとった。アンケートの種類は3つあり、そのうち、この考察では市の商工会議所のものを中心にし、他を参考にした。その結果、県境にある行政的影響、利根川の分離性がみられた。

これは、バス路線、運行本数にもあらわれており、10年前のそれと比較すると、北と東へは、のびているが、南へは縮小されていることがわかった。

一方このような勢力圏をもつ、古河市の商業は、古河市民の購買力の東京への流出がみられ、内側からゆらいてくるようすもみられるためその将来は容易でない。

以上すべての機能に東京の影響がみられたが、それが年々増大してゆく中で、単なるBed.townとならないための方向は整備計画に示されるように、総和村との合併に見い出されるであろう。

長野県白馬村地域の 地理学的考察

高木道子

白馬村は、長野県の最北西部、北アルプス白馬連峰の山麓一帯を占め、気候的には高冷地としての性格を持つ、耕地には狭い限界（耕地率7.1%強）を有する村である。

現在、産業別には農業就業人口が60%以上で、農村として位置づけられようが、その割合は全国的な傾向に加うる観光経営拡大という近年の動きから、減少の一途を示している。

農業の内部は全村的にはほぼ水稲単作経営であるが、歴史的には、古くより水稲を中心とした主穀農業が主流であったとはいえ、現在のような商品的主穀農業が営まれる以前は①近代以前より大正時代に至るまでは農耕用ということを主目的としつつの馬生産、②大正より昭和30年頃までの間は、戦時中を除き、副業的な養蚕業、と収入の道を求めていたのである。そして昭和30年以降、農地の基盤整備、全県的な水稲栽培技術の革新、観光経営への傾斜等に伴って、水稲作一本とする商品生産がすすめられ、現在に至ったのであるが、水稲作への一本化には、農業を行う上での自然にも交通にも恵まれなかったことが結果しているということもあろう。

さて一方、増加の一途をたどる観光に関する経営について、この村の「観光地としての利用度の変遷」という形でその足どりを辿ると、ほぼ4つの時期に分けることが出来る。つまり①近代以前より明治末期に至るまでの観光地としての利用ゼロの時期。②大正より昭和戦時体制に至るまでの、近代登山あるいはスキー導入というものが進展し普及し、白馬山麓が観光地として歩み出した時期であり、観光経営